



前太平記圖會

一

13
1830
7



門 伊 雜
第 1866
卷 1-6



自序



余亦裁此新編の極を極す白紙のりくは形井
かるあり源は入るるを旗をかえりあかとお月え
無かかたれをう一第を書きつたれと形一思を色
源乃姓ハ六孫王の所より多田の満仲と共平将所純友
をほろり頼光をををををををををををををををを
大江山千丈嶽のたに四天王と共平一鬼安ををを鬼の志こ
弟はきりたりををををををををををををををををを
討る人々何の事おとむ馬あゝ海をりて一敵を安く

亡く國中をさしゆく頼義を十二の初夜候とある頃
らう奥に安倍自任宗任とて追捕候とて下り
かきく乃戦ありと候くのほはまの河のき日此喝小條
村弓騎込とて岩を穿ち給へは清水にたどり其諸軍は
喝をさしてせしむる石居の馬のり人さう壺かてへ何乃
居候のやううふ其共う祝しとて忘しむる志候しとて
今小土亞升とて婦貞任候とて一原七騎討つる遠山の
兼乃者も恋小尾花のまじくおちかくかうれ念ひを候ひ
かほもねあしとて奥のやこれ兵に乞出ぬの武則と共小旗を

あもりしとてのひさし厨川北城やと自任亡きとて首八都小
のほり宗任は人となりて八幡屋小従ふまし形人前九年此
たのひとて其後家衡武衡等とてたて兵隊あいにましも
亦八幡屋初むとてのひさしとて軍師とてある時秋の風
掃ふ吹りたりたる小層のほらみとてさうかりく飛を
尺指とて跡小款の伏せありとてさうみねく唐とて給ふ注
ねく家衡武衡は候しとてたて馬代とてかきとてし
後三年の軍とて八幡屋のそれいんをこまひありとてひひ傳ふ
籠北梅志の風とてかきとて今ハ世うとてかりぬとて

古くしてよみかき多しなほかゝりてしりてとまててまやのふれ
 山名のはれはくしりてをたふれく書るのふえん人々その
 弟はゆきおきききゆるし後かゝりて享和之れより
 みのく乃香弥生の日志る事

秋里竹離書



前々平記圖會卷之四

目錄

碓井貞光爲頼光朝臣臣下
 頼光朝臣上洛酒田公時爲臣
 洛中天怪渡邊綱斬鬼臂
 土蜘蛛退治
 弘徽殿女御薨去主上幸花山寺
 花山法皇熊野巡幸
 一條院受禪多田滿仲祝髮
 丹波目代草馬頼光朝臣出陣
 頼光千丈嶽發向籠宮願書



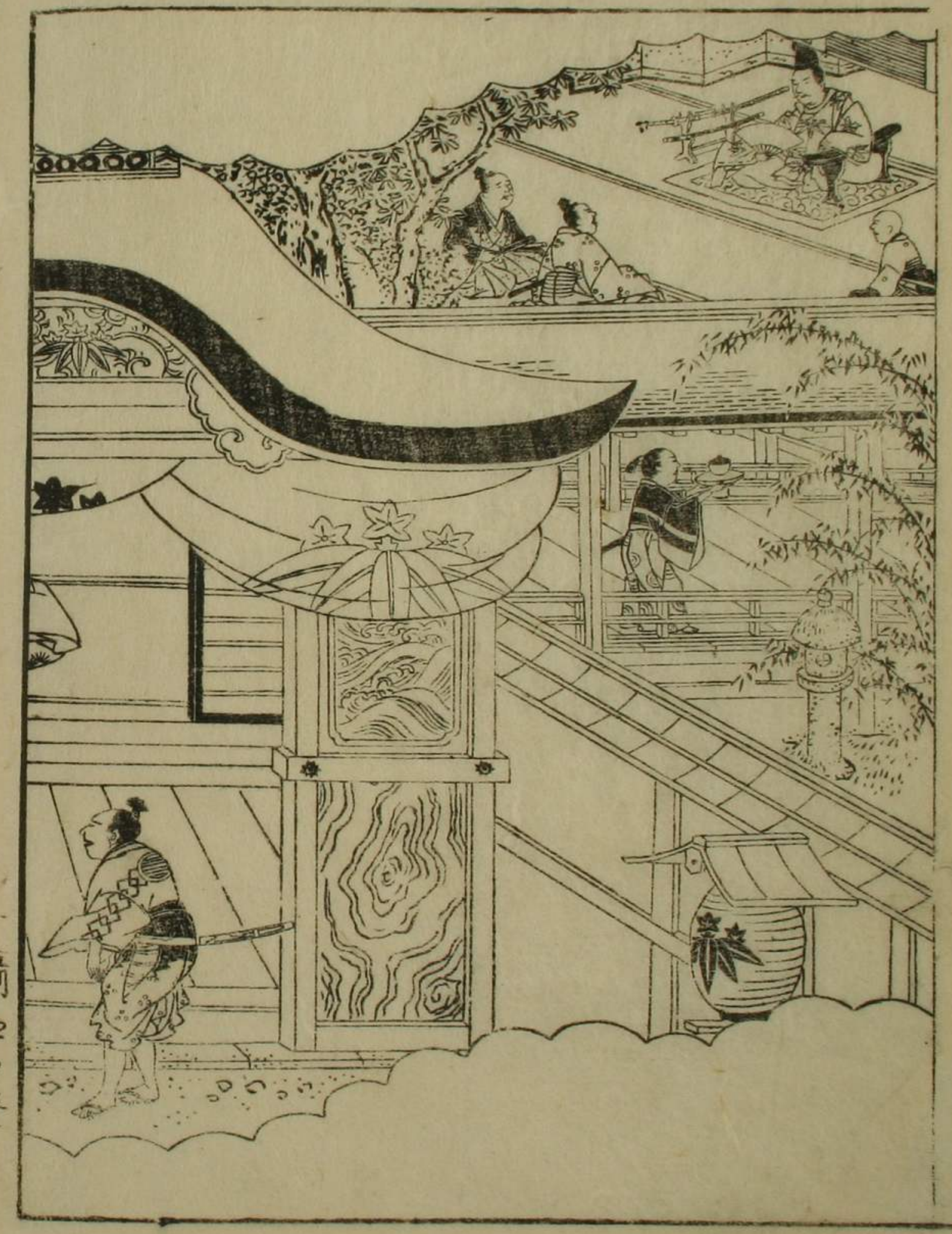
酒
 顛
 童
 子
 退
 治
 大
 江
 山
 陷
 城
 頼
 光
 朝
 臣
 凱
 陣
 賜
 勸
 賞
 頼
 光
 朝
 臣
 誅
 戮
 市
 原
 鬼
 同
 九

前を平記國會卷之四

碓井貞光の戦死の事

上総守源朝経之のちんねるはより南國に着任あつて國考と稱ひ難
訴と交對しまた臣の化の由なる事源にほつたりしれえつりく
おりめと申す元國とおもて天下の武將と人の強き即後と後
せくらのまほし先秋又後仲の居るは仲之季國之推は臣とのりく
治平平天下の功とせしむれは後下部のあ傑のりよとあ一人を加
べ天下のまにわつたの将軍とわんとたふして臣のまほしき一をよ
かゝる事源がし務めて天正二年十月廿二日乃早且綱平武とたつて
のほひたることし今秋又後仲の居るは仲之季國之推は臣とのりく
かく捕らつたりる月日晩系にひきまて一も獲たは列平と引くむらと
りては時子とゆる尾上より獲一史おまるとれえおりて引絶事分と唯

二刀に引上りては猶の後をりてありては只はしなましくはるもの其
又侍の具せざるまればかかまらうらうらうらうらうらうらうらうら
そる里人忽死と恐むおれえにわくのほつたが獲る者後公のり
そるいはは後公は海よりあつたにたれとつてとて件の殺法とあま
れ光斜るはたはびとて問く曰君は何人ぞ其人の曰われ南國流防は
らうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
おらひをれはあはれぬらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
トて曰わらわの者いれ影虎羅のに猛勢は所はた君は何とて遠るん
とせし果てくさるまはたはひき今秋の由後見とてつて天正二年
し君はよつたおらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
おらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
ごらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら



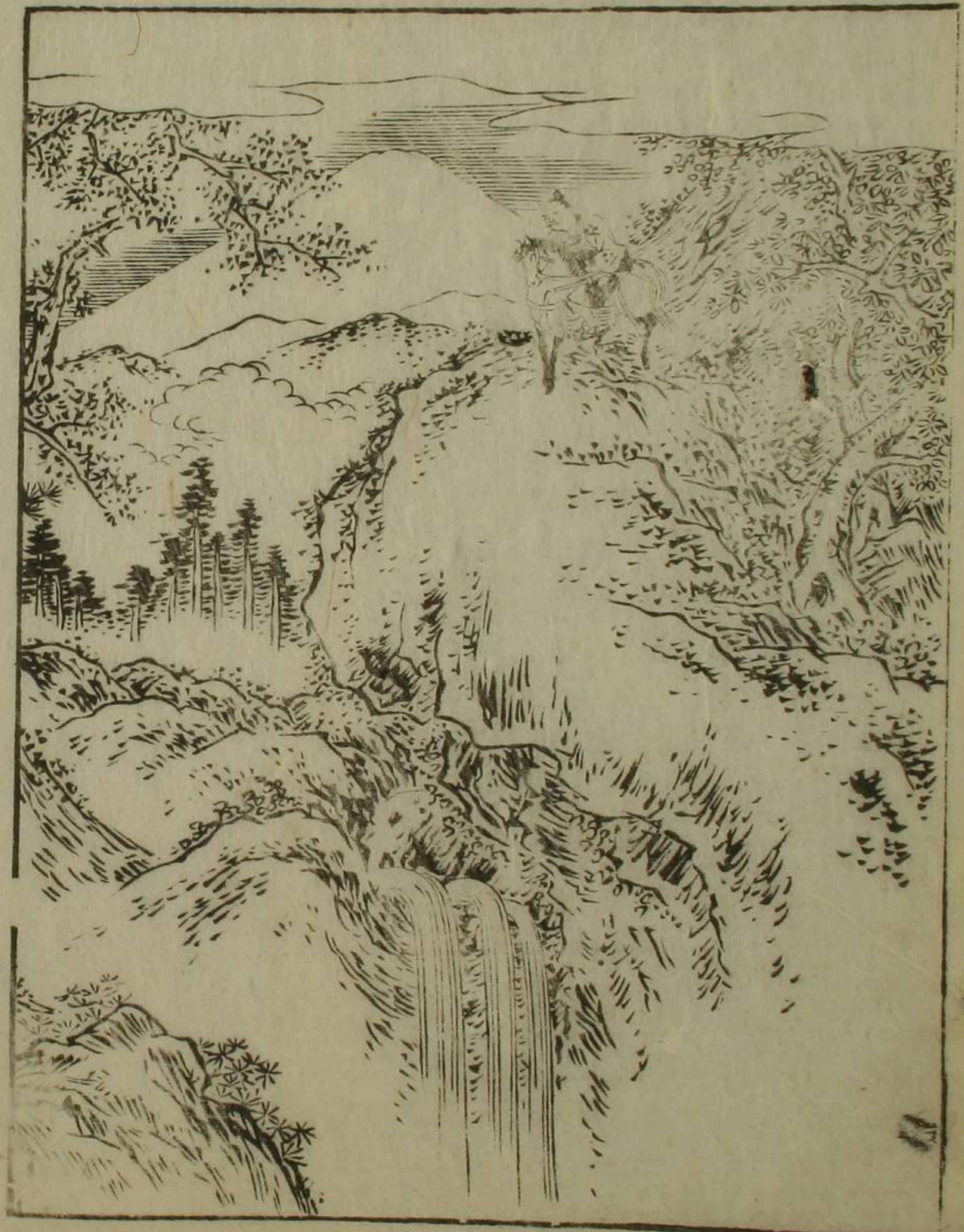
年老くもろもを病り子ひまに推はり附の幼者と枕に迫せてアケるは眼
 ぶら老るははえのまぶらくとも今ふの直事と云ふは先祖の徳の
 とく武勇のまゝなりしがまに世でまゝ武勇は清くまゝに代を歴たり海
 が母子のまゝ事と欲て兩國防の心許は祈禱して汝を殺し則母の二月をまらに
 空くぬ積又世を勅勅の方うまに世に出まるとは先祖も汝に代はまゝのま
 の徳もまゝはまゝに先祖の徳はうる方にも給はく武勇の名は取れ家とし
 真良し是こそ汝が先祖に對しこそ老朽のまゝを頼り今合く頼りこそま
 りぬのまゝ真附いまゝ七葉のりがまに遺言はよくして胸中に託くまゝに
 かく長くはくく熱心よと申すも打力をも早業に替へばくは遺言の
 かく先祖真一の名は取れまゝのまゝもまゝにまゝに代は十葉のりまゝに
 て麻様と追はし諸事と射るまゝにまゝに代は石を石に轉へぬ牧の馬に繩を纏て
 かけくまゝに廣野を馳せまゝに切瑛琢磨く其身を懲りまゝに武勇を勵

かくもれはまゝに別はかもくもつ務をれば人の心をまゝにまゝにまゝに
 必はく十口葉の附自元服くも名を代へて名を代へてまゝにまゝにまゝに
 今もまゝに祀りてまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに
 かく元氣の負をたれまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに
 先祖まゝに給はせまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに
 かくもれはまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに
 かくもれはまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに
 上へのまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに
 七葉の林より十八葉のそとにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに
 一七日まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに
 まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに
 拙くもれはまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

兼てついでに其の氏を以てもゆるりて存下を以て恒せしむる事即
 兼道と名まひては各守固多の事をもあてまつりてありむる虞舜の如く
 暇が子るりしを以て姫と帝堯に奉用せしに徳を施して支那に百餘列の帝
 業を以てたつて有年の際に所しが殷の湯の如く徳を施して殷に百十年を
 其の賢の如くと遺るるは其武勇に事むる姫と唯丹の如く其子孫の如く窮
 業と致さんて子細に身がたはれぞ知るる民姓を承けてはる人やなく即
 賜うらむる自ら席をきてお淵に一五かむむける内録もその金貝の
 白龍威の鎧は小奥豆付印もの燕尾の甲令炬の刃一振りの縁はるる
 ねんく見えの如くはるるを賜う割御の如く分て自らをてらるる事
 とうれしく網を以てたる相頼之の御身と離るる縁は其月のできる事
 ねと勵之教を及の如くはるる名譽の勇士を成りたり

頼之の居る上居酒田の時あり

兼てついでに其の氏を以てもゆるりて存下を以て恒せしむる事即
 兼道と名まひては各守固多の事をもあてまつりてありむる虞舜の如く
 暇が子るりしを以て姫と帝堯に奉用せしに徳を施して支那に百餘列の帝
 業を以てたつて有年の際に所しが殷の湯の如く徳を施して殷に百十年を
 其の賢の如くと遺るるは其武勇に事むる姫と唯丹の如く其子孫の如く窮
 業と致さんて子細に身がたはれぞ知るる民姓を承けてはる人やなく即
 賜うらむる自ら席をきてお淵に一五かむむける内録もその金貝の
 白龍威の鎧は小奥豆付印もの燕尾の甲令炬の刃一振りの縁はるる
 ねんく見えの如くはるるを賜う割御の如く分て自らをてらるる事
 とうれしく網を以てたる相頼之の御身と離るる縁は其月のできる事
 ねと勵之教を及の如くはるる名譽の勇士を成りたり



前記

を承くるをきりしるに怪しくして杖をたたくも知らず只右の目若のいふ
所より来たるまればありけり其れと氣づくは其れをさうさうとくは
一室人傑の居る所なりとて入るも其れを網の目とて馬引あたま
まゐると同じに歩み歩みあるがごとくして下りたるに
いづくにても後戻りもせざりてはたしとてふれは
おく本後の路とていふ單推合本の枝とて月夜を照らす
怪の音直るあり内は秋子とていふ六十餘の姫に傍に面どは女司のあり
んがまゝを形なりとて近居りて後を歩ませりては老姫とていふ
誰と問われは列刺は頼之の居る所は後を歩ませりては
かひよのふかひはとて歩ませりては具とていふ事下りの所はにまゐりては
老姫因て大守の位にして扶け出立とて加りて網の目とては
姫とていふ守其様とていふ女に人まゝとていふ物もかゝるは
新に

不々々件のを飛と清引く歩りてこれに後を歩ませりては
と平比のてく歩りては守のあひを歩ませりては其れ
と見ぬを歩りては其れとて同くは老姫とては地のあるは
何とていふ女に守其様とていふ事下りの所はにまゐりては
と一妻置ていふ守の位にして扶け出立とて加りて網の目とては
中は守の位にして扶け出立とて加りて網の目とては
と事とていふ長はひとていふ事下りの所はにまゐりては
と守の位にして扶け出立とて加りて網の目とては
に神とていふ時とていふ高電睡真とていふ物もかゝるは
ていふるてありては子とていふ事下りの所はにまゐりては
と事とていふ帝とていふ事下りの所はにまゐりては
と事とていふ帝とていふ事下りの所はにまゐりては

之と憑は心のなごりも思ふも人の死をまじはんと宣ひまを老嫗あつて
 ひと獵人あつてあつて浦と使ふあつて守り守りあつて其武勇あつてあつて
 其い言をひくくつてせんとあつてもあつてもあつてもあつてもあつてもあつても
 守り守りあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 らは喜ぶひ族のあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 拍子とあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 守り守りあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 面白識はるる事の時あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 舞臺とあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 取は供とあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 文武威とあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 けいへは天下の名をよきとせむとあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

洛中大怪夜を個斬鬼脱

東路にん去まれ秋の始よりあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 うああらんぞんを怪あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 文怪多き中に老若と撰む男女と嫌む人多くあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 一門に別るる中にあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 形もつ事もあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 は申却りつりうぬまむ人多くあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 い洛中もあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 武の乃の貴族に人あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 らせんぞんとあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 法源庵と會場止仁王會とあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 下とく國の武士あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

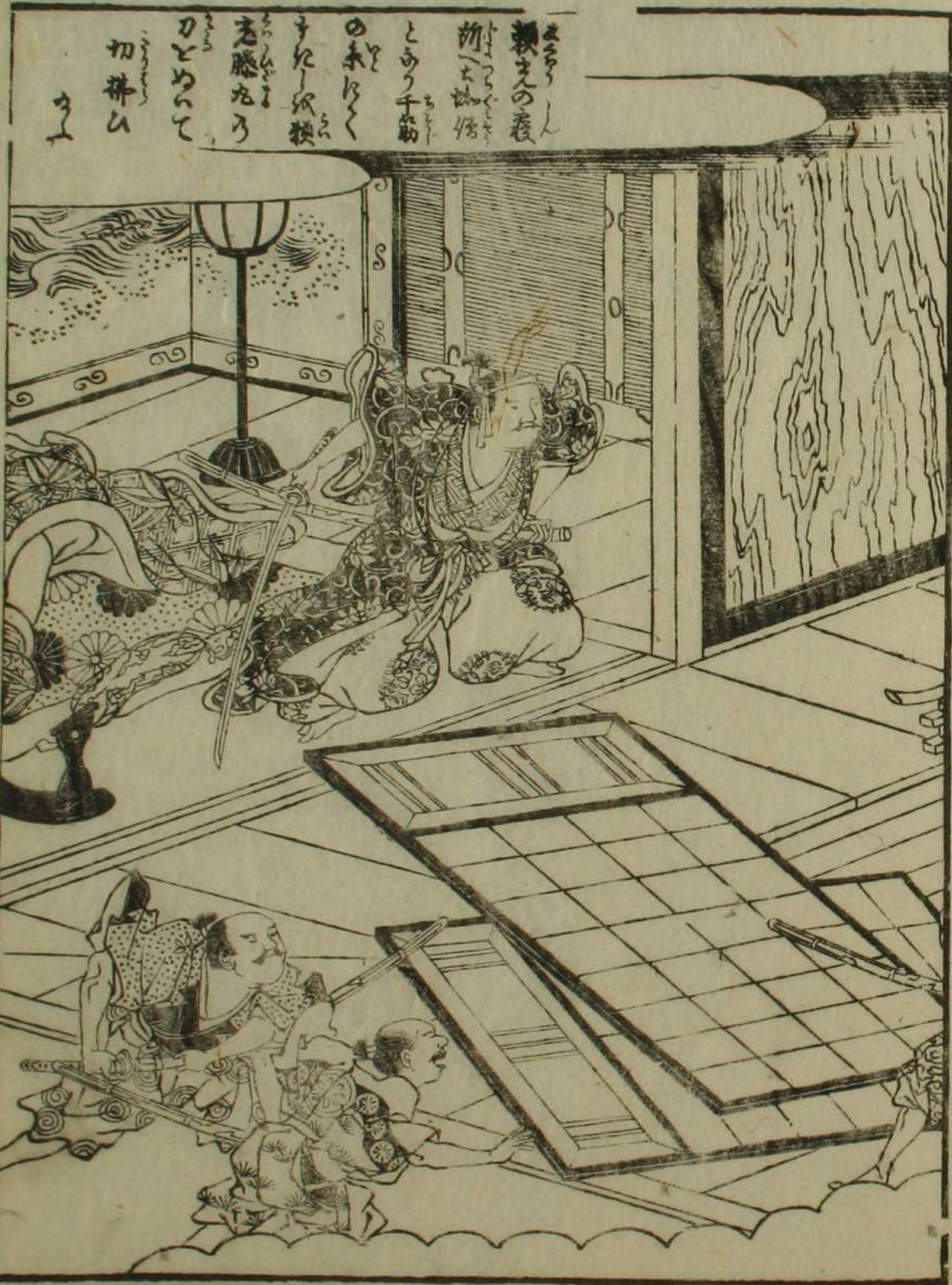


日満寺と保守は頼之保法守は親上野守平維叙肥後守日維信忠守日維平
を文維幹河波守小北保衛相模守橋敏貞河内守純淑守丹後守大に朝枝下社を
看尔千時其外武勇父名と見しる所の武士國より上洛して禁闕の門と衛
る期も洛中を振るりざりたれまゝ法を衆評あり先上並にけり、其の
御出ふるいふる要天の魂のたぬる其子細とる回くせし其頃天下第一
博士播磨守安清晴明とらゝ島へべきも信付らるひ晴明とて天文曆技の
事い法湯頭賀茂保憲の肺肝よりかく其たに通せざる幸恰も宿命通候
ゆゑも現來のるをよきとてまことんかじ即ちいひけるる年度の妖孽必
も小保の幸にあはれ山崎國守保良は橋の幸にせらるるの鬼女ありかまの妖
天を其御守あることこの女ありしを能うに嫉妬するかくせらるる鬼とて妖
とる女とて殺せんく貴社の社に祈言しとる洛の川瀬に二十七日はくは
其形を死するれども一念の冥鬼鬼取とて妖とて女其縁就とて荒む頼頼

は思議のりくちて申したる城一なる洛橋の下に其作らばは天考なるの辰
儀右の暫忠文東夷西成の追討候じとる女向の和に度なき精四りきたよ
ゆゑ忠實も行きは其怨とてく瞋まはし申し死するあぐの怪異と現はけり
其更とて宿の離宮と祝ひしより稍其念をづまうぬれは其冥彼鬼女
とて夫婦の契とてあるとるの恨とて死する鬼女とてく洛中とて祈せしめ
怪なるに後弘仁年中抄列西生和長物橋とて信に橋娘の宮とて後とて
橋あるに信の橋もみかめいけい女とて法とてくは洛橋の下に小祠とて
て橋娘とて祝ひしとる冥冥忽納りしとる洛中の素堵子細とてを奏する縁
殿をとりしとる今まぐ晴明が御一つしてお遠くをさるるりたれ即ちとる
保らるるも其経言とて聞にたれ禁闕の武士の申上総守源約長
整へて國邊とてくるれとて申候目とて漸くは月九日系伝とて其其
風闕の陽明門をさし居せらるる其身を衣冠の下に若菜白の長背長膝をさるる二

髪狐網で乾の方ぞ赤ひくる網ゆも積ま件の後切をさうも積まざる鬼のよ
 うでいし斬る鬼に小社の社の回廊の上たさうもあ鬼かよと切まかす
 たいぶいし
 えひめらるゝ經回廊う跳ちも髪に付らる鬼がよとさうも積まざる鬼のよ
 うでいし
 悪くあがり白髪固うて生落し銀の針とさうも積まざる鬼のよ
 うでいし
 頼えんに驚きふんや湯の幸うまごも女暗明とまのきんくうも積まざる鬼のよ
 うでいし
 まふよと活中と怪せし宇治橋の鬼女の無靈殿の武徳はたが男殿さうも積ま
 ずいし
 捕して殿に帯付のさうも積まざる鬼のよ
 うでいし
 能く射しまはせし積まざる鬼のよ
 うでいし
 既にいひしやう実忠時に網が守所を叩くいひしやうどとあまは湯がまは母持列は
 於にあうさうがうたうさうも積まざる鬼のよ
 うでいし
 はさるまもさうも積まざる鬼のよ
 うでいし
 既に今もさうも積まざる鬼のよ
 うでいし

うらまはひもけし居宿とさうも積まざる鬼のよ
 うでいし
 むしちやこれ母固もあまは湯のさうも積まざる鬼のよ
 うでいし
 けさるさうも積まざる鬼のよ
 うでいし
 たるに我を軒乾る所に親あまは湯のさうも積まざる鬼のよ
 うでいし
 早晩林子のぬきのさうも積まざる鬼のよ
 うでいし
 ぬきのさうも積まざる鬼のよ
 うでいし
 うらまはひもけし居宿とさうも積まざる鬼のよ
 うでいし
 むしちやこれ母固もあまは湯のさうも積まざる鬼のよ
 うでいし
 けさるさうも積まざる鬼のよ
 うでいし
 たるに我を軒乾る所に親あまは湯のさうも積まざる鬼のよ
 うでいし
 早晩林子のぬきのさうも積まざる鬼のよ
 うでいし
 ぬきのさうも積まざる鬼のよ
 うでいし



其の葉氏族とてに及ぶに在る者も亦士諸國乃天名孝子に席とあり、その
公卿とあるがごとく二十餘日と経ては、あつたれども少くもあつたれども言ふれ
るに天土のいづれ着病しける者ももつたれどもいづれ病にうつて休むれど
物にいとゆるり幽るる體の下に花と散るる方折まこととてあつたれどもいづれ
もいづれ一條血なりとて是れ末つて二十日餘を病にうつては、いづれ
もつたれどもいづれあつたれどもいづれ病にうつては、いづれ
脊子が来べき者なりとてあつたれどもいづれ病にうつては、いづれ
その眼とゆるりたる者もいづれ病にうつては、いづれ
いづれまこととていづれ病にうつては、いづれ
ませる子やまつち日に病にうつては、いづれ
と病にうつては、いづれ
記より病にうつては、いづれ

其の具すに形をまこととありたりとて、その
まこととありたりとて、その
これたれども射者保昌に在る者も亦士諸國乃天名孝子に席とあり、その
頼親の母方の叔父ありとて、その
其れ対症ありとて、その
たつて血にうつては、いづれ
も病にうつては、いづれ
いづれ病にうつては、いづれ
いづれ病にうつては、いづれ
いづれ病にうつては、いづれ
いづれ病にうつては、いづれ
いづれ病にうつては、いづれ
いづれ病にうつては、いづれ

平地より立へて天に上りて大なるの國より本根の持つる者ありはとて
人々の勇士をよとけけし安をまゆりて引くつる内なる癖者しゆりぬむりくと
記よりつる者取ぬのたれたるに直七人けつるの物のかつらと目入るる
眼の泣のてくはるとと吐く時と能く千ある系と標けくを傷さんと
遠巡ると人々の兵もせんとせんかつちありて眼をさるる者かはれ
てよりわたりきとてか一つ度よとよめし捕捕んと促さるる味いさるは
しはく懸のれにやうあるとあげ八つは足と傷しと創傷とをぞねいさ
は天王の者とも動しと操合るに保留物の背に赤くけつるにけりし
てやがくあまごととかがめつるつるやに其れもめ方にぬく入流と引て後
これに過本の貴賤備にほくつるわー完いゆめつる奇天の曲者とめりぬる
と人々のまにわいづらとあまとつるめつるわえおほのあたつてとら
ば女がぬるる足はの奴を説くと二十八年日怪れらるること不名承るるは
前

に曝ぐどしよめはひこれやがく鐵の串をまならは東に立てとこれら
かつて蟲類の精霊のふるはにかつるの先蹤ありやとぬるにわい人白の娘
神日帯盤余彦天皇の即位に幸に紀伊國名草那る所の林に長二十八年
り蜘蛛あり只はしきつとてか人々を結つる網ととて教里にとて往來の人と
幾字に作しても官軍勅命とあるて張の網と張りて湯湯と沸くは方々
赤くかべ蜘蛛と遊ぶと教れと其ゆかに網とにほ其後十二代大足彦彦代
嗣天皇の御宇二十五年に津島の無量壽菩薩の所へて自皇退位のるに
は川岡島國の朝敵と青麻く豊と國つるあけ國の天皇をよ蜘蛛
て大なると結つる其國の者もよとて責められも人の手換とつるは
謀るとも結つるつるもとて自皇尊の網と結つるひさるひ教りぬはひ
とて教ぬの人かとぬくつるつるが今ある張網のた者も人々の勇士法
掘りしてまお代はとこれらと名承るる結實せぬつるつるこれに藤丸を

御珠切丸と改名と鬼丸御珠切丸いづれも其切雄方と一家のまき目おま
天下の旗獲り

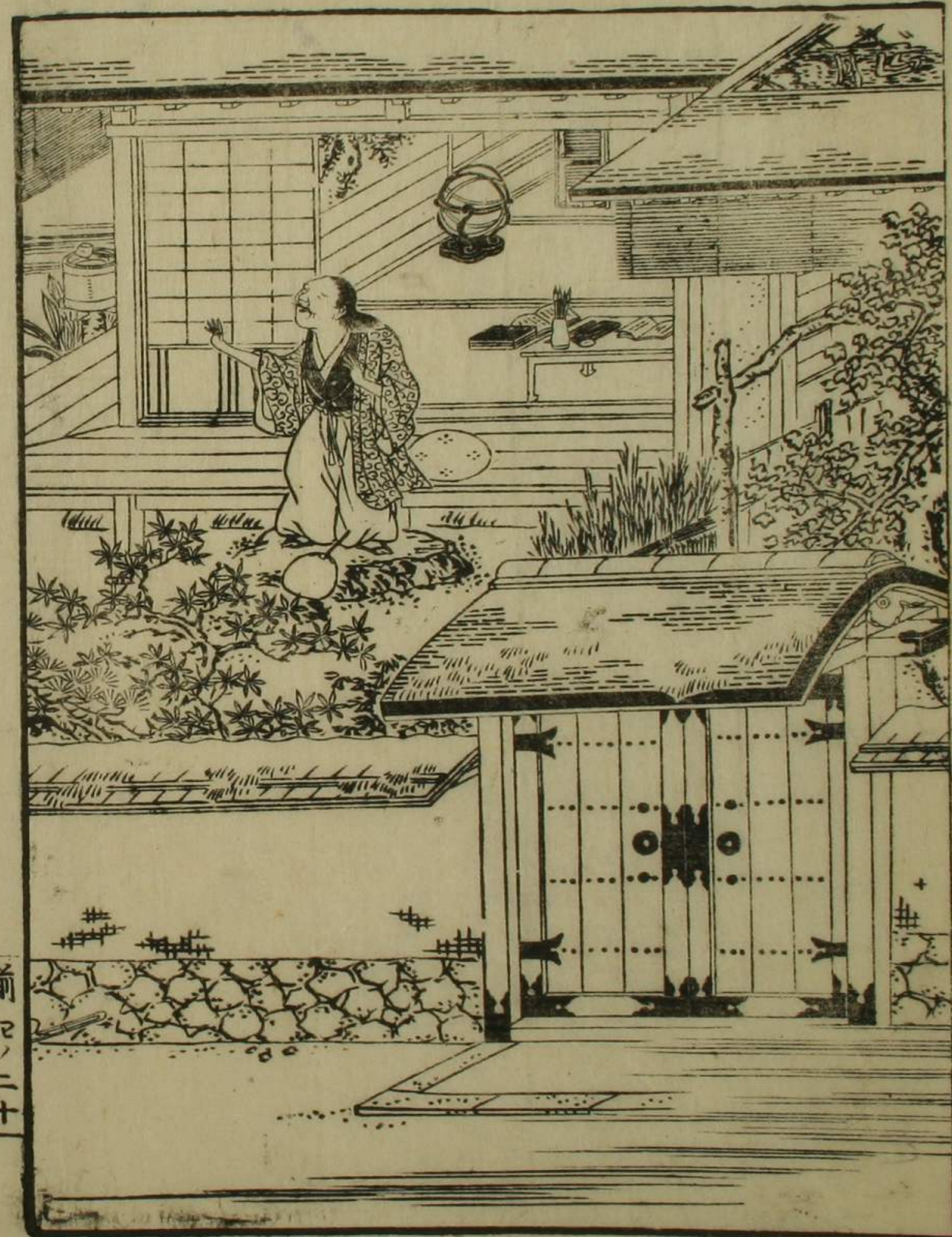
弘徽殿女御薨去主上を幸はれし事

折る今山賊徒の頃二人の美女とありて納く后妃とありて其一人関白
頼忠その息女又一人の御伯る平親王の御女今一人の御言ふ女
わらふとも宮をたぐひ梅にしく杖の杖の物まのふれ艶たるも其真
に誦と曰はる世に御樂にくば月君の秀真と一時にふれに
ふれくま上をさ御言はるるに飽はく物思にわらう造次御神も
君とさく誰か嬋娟とありてふれもまじしが後らう花の色さく夜半
相みえが女嬋子とふれに御室にありてふれも其移らるるま
とふれる海よありぬささるるふれくま上と君ににふれさるる
御心もたぐひあやうら御思の園とま人の道は幸も御眸と廻るに

夏は今いけく人の御も世の世も包むるの御もく後いれさるるふれは
亜相もくく祥し中されまも御命度まられが御に候ひまへ御
やがく弘徽殿に候しとた御思にうら候らるる御日くはくま老
御化の忠信の御も御まはるる日の暮るる御日御日御日御日
あは秋の夜の御やねはも枕とるる御とくはくま御とくはくま
まは世の外にも御とくはくまの后妃再御眼と見るとあは空房に枕と
款言打雨に候と御とくま御まはるる御中候とくはくま
官の御候顔色とくまの官女候候と御とくま御まはるる御とくま
て御思の御つじ御の二念の御の御つじ御とくま御とくま
かりに弘徽殿の女御御を地御とくま御とくま御とくま御とくま
まは御とくま御とくま御とくま御とくま御とくま御とくま御とくま
候と御とくま御とくま御とくま御とくま御とくま御とくま御とくま

事やも中々悪く解るる多々の美傍る僧に石く脚加持るむぐりももま
さうらやど時かびてさうら周身に汗と流し美理のこころかめくもて見
知うらむぞ能くさうら心といひりくさうらたうらまはま上ふび形貌と神授あ
ていふ慶喜とあはれ亦も玉作あはせまひてもくえ地に備作あははれ
どもままやま平の所うらうら終つてあはれいりるまの神をなやまま
神非のあまりの神心地おねくさうらさうら慧に信ままらせまひり神
上皇泉もあはれ神の神ありていさか念まはまらにあはれあはれ
てた右の近臣もあはれに陳慰するあはれもまた神也止まらに利神祚下
てせとて厭せまらまの神心あまらせはりくさうらことせらくのと神といはせま
内くこの傾きやうらまの后妃をに能く信まら神行のり西へはらま
も源のり弘徽殿とまら神心にもあはれ希有の神也まらまらまら
私語やうらか雅十上うらまら今な弘徽殿の女神のあまらまらまら三人の

伝妃の肉く兎咀くさうらあはれと慶喜に事りれば大に逆縁あつて死
流罪にもさうらあはれも人けを將せまひく二人もに宮中と退あまら
まらまらやこれまらまら月往くも弘徽殿の神とまらまらまらまら
にるる神煩襟に夜神あはれに引籠まらまら萬機をまらまらまら
まらまらまらまら香も絶にまらまらまらも朕が息まらまらまらまら
にまらまらまらまら
色香ともまらまら入まら梅うらけはひるまらぬまらまらまら
く神はあうらまらも神あはれこの教うらまらまらまらまらまら
経渡漏まらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら
りまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら
くの具月頃月まらまらまらまらまらまらまらまらまらまら
まらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら



出陣おのりたる御恩の幸うまに御働るんども合はせざりければ泥土の御安
初はくたるこそほのむらつひうかすもおとまあつてぞぞんたる破陣の死心寺
はく御安あうて終夜たぐせまひたるを時時と南をに風とむる異と通く
いまこそ藤もぞく居たりが月東よの上によく杖にたてた向くは守を教ぬ繪
重なる彫珠松響音疑ま馬も亦恨流星まれをう全まをる時うくまれとれ
ども夢うらむき佳景に異ととる夏ととるに晴き春にけがさる候て
天ととるく六に驚きとる色はくあふる不意や天家交まを皇はまれを作と
避るのおくゆとくめる怪異あうるるぞ急来内とくめひきまんとくこれおも
とく故き懐ひめううまよと御前かようけ候と慶園あうて元柿の晴明か懐きや
ま宮中はくゆはせむ追ひともまの春をまをさる候とまぬぬとまあうるうと
ても御安ととめられりうるわん時ゆとあはくくま迫てまの振とる
中々れも宮女も夜も帝の目とせまぬとも知は時時がに付ては御安

前にノ女一

夜御殿中ひびき殿の宮舎は香くぬすやせをれもくは御安もれは
ささるうらうらに火親の火門唯今ふあわらくはく細くひくたう供は
うくも供とせまひたるま月来の奉ととけさまひたはくそとく通は
の女御を夜御侍候とまもまうははは宮中ひびたはまうと云々七左
八辨と供とま内とくせん周章ととまと折備ととくはくあはとそ
たる計り風筆腰輿もつづは御車にあらはれととめく御安初はく
らまひたるらんまはまをくはくまの御安も追はけまうとめま
せんとも積もくと十方に分く御安初ととめまこれととく御安初とと
とめととる

花はは曾野

秋とてはめては日上とくは心をたかへまははとえたればはる追はく
なれもとる御安ととめこれととる御安初ととめはははととる御安初ととる

花山 法皇 那智 山 本 春 流 神 龍 乃 寶 器 乃 子



前
 尺ノ
 丈三

満仲はあつてむとむと多田にのつれさるが途中の彼等とてて横河の源信房
於て心腹にきりたる つ あつて むと むと 多田 に のつれ さる が 途中 の 彼等 と て て 横河 の 源信房
夜の儀則くは活盤敵くは夜冠正くは美三時院に併おにひたて供ト
香と捲これお茶敷くおにひたてなまの御金身とてとめまの二族すぐま
内陣に列をあり舊代か校の事と外陣に藤と款と並居らうめて源信房都
戒師くは満仲の後にさうう新に冠と藤を戒文にの偈と彌り判りとてま
御子立整と種と髪と剃落の事を来はのお張と授け秋の儀の法衣とて
は名孤満まと号しうままのちまのちて喜ぶうと斜すは今年七十歳之
にも益量の女お月来にあらなる感徳とてく列をのくくはひくは徳とて金
多のうらう御王座のちめて剃髪のをありては日々に法たと成りて其外舊代ら
老は教書ももはは切と日ど縁縁とてうらう今日けして満老の教書とては死
三時院とての儀としてまにのちひたる

